

活発な参加が 求められる授業

〈アメリカ〉

藤田 和也

私のみた 海外の大学事情

私は本年三月までの二年間、アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）の School Nursing と School Health Education の制度や実態を調べる目的で、カリフォルニア大学のサンフランシスコ校（UCSF）とバークリー校（UCB）にそれ

それほぼ一年ずつ在籍した。今回の主目的を、小・中・高の学校現場の視察とスクールナースへの取材に置いていたので、大学内での教育や研究の実態をつかむ機会がなく、その努力もなかった。そのため、本稿はアメリカのある大学を外から眺めた風景画であり、しかもあまり絵心のない者の描いたスケッチでしかないことを、お断りしておきたい。

インターナショナルな町・バークリー

バークリーはサンフランシスコ湾をはさんでサンフランシスコの対岸（東岸）にあり、人口十万人あまりのベイエリアでは比較的小さな市である。その人口の約三分の一は大きなキャンパスが町の中央部を占める UC バークリー (University of California at Berkeley) の学生と教職員であるというから、まさに大学町とよぶことができる。

キャンパス周辺はさすがに大学町らしく、学生向けの寮やアパートのほか、書

店とコピー屋さん、そして学生相手のカフェやレストランがとても多い。バークリー市の書店の多いことは、人口比率からみても全米のトップとのことであるから、私の単なる印象だけではない。コピー店も多く、大学周辺に七、八店はある。一枚四円くらいでコピーでき、大学図書館を利用すると十円余りするので、私も図書館から本を借りだしてはせっせと近所のコピー屋さんに通った。

このベイ周辺は（カリフォルニア州全体がそうであるが）、白人をはじめ、黒人、ヒスパニック（ラテン系）、アジア人など、移民、難民を含め、さまざまな民族・人種が集まった地域で、特に UC バークリーは世界の各地から研究者や学生が集まってきたというインターナショナルな大学であることもあって、この町はさながら人種のもつばといった感がある。

広大なキャンパスと優れた施設

バークリーキャンパスは、College と

School (College) は一般教育を施す学部、School は高度な専門教育を施す——多くは大学院(合わせて十四学部、学生二万人千人、大学院生九千人を擁するだけに、さすがに広い。芝と木々の緑に覆われ、ゆったりとしたたずまいのキャンパスは、狭くて小さい日本の大学のキャンパスを見慣れた私にはうらやましい限りである。これでも州内の他の大学(例えば UCLA やスタンフォード大学)のキャンパスほどの広さはないし、取材で他州に出かけた折りに見て回ったいくつかの州立大学も美しく、もっと広大なキャンパスをもっていた。

うらやましいのは広さだけではない。パークリーではキャンパス内外に図書館がいくつもあり、蔵書の数は一冊本だけでも合わせる七、八十万冊余りにもなるという。もちろん、それらは全てコンピュータの端末機で検索できるし、近辺の州立系大学ともオンラインで結ばれ、日数さえ少し待てば取り寄せて借りること

とができる。スポーツ施設も日本の大学の比ではない。巨大なフットボールスタジアム、陸上競技場、二十面を越える夜間照明付きテニスコート、屋内・外プール、大低二、三ヶ所ある総合体育館等は、総合大学 (University) の「標準装備」といってもよいほどである。

何しろ、アメリカの大学、とくに総合大学の規模の大きさと優れた施設にはとてもかなわないというのが強い印象である。全米の大学教育をまかなう経費が合衆国全体の GNP の二%を越えるといわれているのもうなずける話である。

多様で大規模な大学制度

ここで、UC パークリーがアメリカの大学全体の中でどのような位置にあるかを知っていたために、アメリカの大学制度について簡単に紹介しておこう。

アメリカの大学制度はその規模の大きさと多様性が特徴といわれ、これほど多様で大規模な高等教育制度をもつ国は他

にないといわれている(喜多村和之『アメリカの教育』)。それはほぼ次の四つのタイプに分けられる。

まず、地域社会に開かれたコミュニティカレッジとよばれる短期大学(民間と公立とがあるが、公立が大半を占める)がある。公立のコミュニティカレッジは州の予算で賄われ、非常に安い授業料で教育を受けることができる。各種専門のコースと一般教育のコースをもち、高校を卒業したての学生だけでなく、仕事をしながらパートタイムで通学する多層な人々がいるようである。日本で専門学校(の教師をしている妻が、被服関係の教育の様子を知りたいということで、パートタイム学生として二、三の授業を受けたが、クラスメイトには、高校を出たばかりの若い人から、スーパーや商店で働いているパートの人、かなり高齢の主婦など、じつに多彩であったという。また、ここでいくつかの単位を取り、一定の成績をおさめて、他の四年制大学にトラン

スファア(転学)する者も少なくない。

次に人間形成や教養教育に専念するリベラルアーツカレッジ(四年制)がある。近年では、この後にあげるようなより上級の大学にトランススファアしたり、進学したりするための準備教育機関化しているといわれる。この大部分は私立のようであるが、滞在中に実地見聞できなかったので、実際の様子はわからない。

そして、多様な一般教育、専門教育、さらには成人教育の機会を提供する総合大学がある。全米では、私立、公立ともほぼ同数くらいあるらしいが、カリフォルニア州でいえば、CSU(California State University)系の大学である。

CSUは州全体で十二校あり、各地に散在している。数個の学部をもち、学生数は二万人前後を擁し、学部教育と大学院修士課程の教育を主体とし、州内の高等教育の主要な一翼を担っている。

最後に、研究や大学院教育(博士号を授与する)を重視する州立や私立の巨大

な総合大学がある。カリフォルニア州では、UC(University of California)

系の大学九校がそれにあたる。州内の私立ではスタンフォード大学がある。こういう大学は、学部教育もさることながら、修士以上の専門教育と博士号を授与する研究・教育に重きが置かれ、いわば「大学院重点化大学」ということができる。

そのため、かなりハイレベルの学生や大学院生がフルタイムあるいはパートタイムで通ってきている。UCバークリーは文字通りこのタイプの大学である。

ちなみに、UCバークリーは、研究室で全米でも有数の大学のうちに入っている。大学案内には、これまでにノーベル賞受賞者を一五人も出していると誇らしげに書いている。また、知られるように、アメリカには独立機関による公・私立全ての大学を対象にした大学評価のシステムがあるが、その評価によると、UCBの大学院の三十二部門のうち三十部門までが全米の十位以内に入っており、

その数はハーバードやスタンフォードよりも多いのだそうである。

柔軟で、開かれた側面と階層分化

このような多様で大規模な大学制度の中で、私が強く印象づけられたいくつかの特徴的(実態的)側面にふれてみたい。

一つは、日本でもよく知られていることであるが、アメリカの大学は、入学者の選抜をはじめ転学など、非常に柔軟な教育システムをもっていることである。

まず、日本のような厳しい入学試験はなく、多くの大学では高校での履修科目とその成績、進学適性テスト(基本的な学力をみる共通テスト)の得点、高校での学習・活動状況、面接などの総合判断で選抜するという。したがって、一定の成績水準をもっていけば、それに合った大学の入学許可が得られる。

また、先にふれたように、一定の履修要件を満たし、十分な成績をおさめれば、より高いレベルの大学にトランス

ファーがいつでも可能である。その代わり、一度入学が許可されても、その大学での成績がおもわしくなければ、退学を余儀なくされる（多くは自分に合った他の大学に転学する）。したがって、学生の流動性が大きく、学期毎に学生の顔ぶれが変わるということも起こってくる。

さらに、四年間の学部課程は一般教育を施し、本格的な専門教育は大学院で行われるという位置づけになっているので、学生は学部課程への入学時に、必ずしも専攻を決める必要がなく、また専攻を決めていても途中で比較的容易に変更できるシステムになっている。

二つには、上記とも関連することであるが、大学がかなり広い年齢層、多様な人々に開かれているということである。学生にフルタイムとパートタイムがあることは先にふれたが、パートタイム学生や大学院生のかなりの部分は、現職をもっている人たちである。私がお世話になったUCサンフランシスコにも、知り合

いのスクールナース（五十年代後半のベテラン）が博士号を取得するために仕事を続けながら通っていたし、何回か出席させてもらったUCバークリーの教育学部の大学院にも、何人も現職の教師が通ってきていた。再教育や現職教育の体制や生涯学習を保障する制度は、日本よりはるかに条件が整っているといえる。

三つには、これらの制度のもつ陰の部分ともいえるべき側面であるが、先に紹介した四つのタイプ分けは、ほぼそのまま学生集団の階層分化を反映しているといえる。アメリカの教育制度は、周知のように能力主義を根幹としている（能力別クラス編成、飛び級、上級大学へのトランスファー等）が、それは同時に経済水準の階層性をも反映している。コミュニティカレッジには、比較的学力の低い、低所得層の人々が通い、一定水準の学力と比較的経済的安定度をもった人々は中間層の大学へ、そして経済力を持ち高学力の一部の人々は授業料が高く、教

育条件のよく整った有名私立大学へ通っている。アメリカの階層格差の大きさは日本の比ではないが、大学教育もまたそれを端的に反映しているといえる。

ある授業風景——多様な方法で

余儀なくされる活発な授業参加

さて、最後に私が垣間見た大学の授業風景も紹介しておきたい。UCバークリーの教育学部は大学院が主体で、学部教育は副専攻学生を対象に開いている科目がいくつもある程度である。そのうちの一つ「教育における最近の諸問題」と題する授業を数回聴講した印象である。

まず、授業のスタイルが日本の大学でごく一般的な講義調とは大きく異なる。教授は毎回学生たちに問題を投げかけ、学生たちの意見表明や体験発表、そこから生まれてくる討論を中心に授業が進められる。教授は問題の背景などについての説明や途中での問題整理のためにある程度まとまった話はするが、多くの時間

は学生たちの発言・討論に費やされる。

その意見発表や討論を活発にするために、トピック毎にそれに関連する文献を読むことが宿題として課せられる。一回に数本の雑誌論文などの文献を読むことを求められるので、学期全体で読まされる文献はかなりの数にのぼる。これらの文献のコピーは一セメスター分まとめて綴じられ、テキストとして大学近くのコピー屋さんから買い求めるようになってくる。そして、時にはそれらを読んだうえでレポートの提出も求められる。

一般的にこうした学部講義（比較的多人数のもの）には、大学院生のティーチ

ングアシスタントが二、三名つく。この講義にも三人の女性の大学院生がついていた。彼女たちは毎回講義に出て、学生たちの討論に参加する。時にはグループに別れてディスカッションをすることがあり、その時のチューターをつとめる。

この授業では、このほか教育の問題に関して関心の近いものどうしが小グループをつくってプロジェクトを組み、共通のテーマで問題を深め、レポートを作成することも課せられる。さらに、最終的には、個人的関心事に基づいて課題を設定し（その課題は研究的なもの、教育体的なもの、あるいは民主的・政治的な

活動でもよいとされている）、そのレポート提出も求められる。

かなりの人数（百二十〜百三十人）の講義でありながら、知識伝達よりもディスカッションによる思考の啓発に重きを置いた授業が工夫されていること、学生は授業においても、グループワークでも、そして宿題やレポートの作成を通して、かなり積極的な「授業参加」が求められる（余儀なくされ）ることなどがとても印象深かった。聴講しながら思わず自分の講義の進め方を振り返えさせられ、非常に刺激になった体験ではあった。

（一橋大学）